

高校教科書検定の実態

～ 高校生物 I 教科書を例に ～

1: 検定内容の主な問題点

- 事実上、教科書調査官の恣意的な解釈で検定が行なわれている。
- 検定に関する実質的な理由説明はなく、反論もできない。
- 実生活と関連づける記述や背景説明は全面的に削除され、事実の羅列になっている。(生徒の関心をひかない)
- 「進化」など学会での「勢力」が弱い部分が軽視され、結果的に学問としての体系やアップデートな情報がなくなっている。(日本の生物 I は「世界一薄い教科書」)
- 誰が、どのような理由で教科書調査官になるのか不明である。

2: 検定意見の例

元の記述	検定後(検定理由)
アデニン、グアニン、シトシン、チミン	Aという物質、Gという物質、Cという物質、Tという物質(羅列的な扱いはしないということにより、 <u>不適切</u> である。)
「カエルの子はカエル」といわれているように、	<u>削除</u> (種が不変であるかの印象を与えるので <u>不適切</u> である。)
生物学とは、私たち自身について知ろうとする学問の一つである。	<u>削除</u> (<u>不適切</u> である。)
「試験管ベビーと体外受精」や「ヒトゲノム計画」、「エイズと免疫」などのコラム	<u>削除</u> (<u>不必要</u> である。)
仮説は検証された	仮説は正しかった(<u>不正確</u> である。)

【参考資料】

● 検定意見の特徴と内訳

※指摘箇所合計は、**921箇所**。(高校生物 I 教科書のうち、東京書籍・数研出版・大日本図書・啓林館・実教出版の5冊の検定内容を分析)

内訳	分布(%)
誤りに関連する指摘	7.8
表現の修正を求める	54.8
内容に制限を加える	35.2
その他	2.2

不正確である(18.1%)
 理解しがたい表現(16.3%)
 不適切である(7.8%)
 誤解を招く表現(6.6%)
 関連して扱われていない(6%)

不必要である(24.6%)
 程度を越えている(10.6%)

適切な配慮に欠ける(1%)
 その他(1.2)

● 諸外国における教科書制度の概要

(平成13年3月財団法人教科書研究センター調査研究報告より)

国名	教科書制度							
	初等教育教科書				中等教育教科書			
	発行・検定				発行・検定			
	発行者		検定	認定	発行者		検定	認定
国	民間	国			民間			
イギリス		○						
ドイツ		○	○		○	○		
フランス		○		○	○			
スウェーデン		○			○			
アメリカ合衆国		○		○ ※1	○		○ ※1	
中国	○	○ ※2	○ ※2		○	○ ※2	○ ※2	
韓国	○				○ ※3	○	○	
オーストラリア		○				○		

※1: 州により異なる。 ※2: 1980年代の前半までは、国定教科書のみであったが、各地方、個人も教科書を作成することができるようになった。ただし、教育部の検定を受ける。 ※3: 国語、社会、道徳の教科書のみ。